Osaka Shoin Women's University Repository

上代の形容詞性接尾辞「じ」

――打消か類似か――

原田芳起

一　問題の所在

『万葉集』を中心に現われる「時じくぞ雪は降りける」の類で、「時じ」という語の意は、「不時」と表記された例もあり、季節でないとか、季節はずれとか、その接尾辞の「じ」に打消の意を含めて解釈するのが普通である。「時じ」の語義はおおよそその辺にあったことはまちがいなかろう。だが、そう解釈する際に、打消の助動詞「ず」や「じ」を念頭において、それにつないで考えることになると思うが、「時」は名詞であって、それに接する「じ」は、語構成から言えば、名詞に付いて形容詞を作る接尾辞である。動詞に付いて否定形を作る助動詞とは甚だ趣きを異にしているのである。

形態の方面からこの「時じ」と同じか、またはよく似ている語に「我じ」というのがある。用例は一回きりで、「我じく」と連用形で副詞法を成しており、わが如くにとか、わが事の如くにとか解されるのが普通である。意味の上では「時じく」と全然違っているように見え、形態の上では同じく名詞について形容詞を作っているので、甚だ近いか、または全く同一の構成であろうと思わせる。

さらに、この「我じ」と意味の上で類をなす「犬じもの道に臥しなむ」などの歌句に現われる「何じもの」という一群の語がある。「何じ」と「もの」、または「何」と「じもの」の結合による一単語で、品詞は副詞である。形態素を分ければ、「何」「じ」「もの」の三つが認められ、その一つをなす「じ」は、前にあげた「我じ」の「じ」と同じく形容詞性接尾辞であると見てよい。あるいは、「時じ」の「じ」とも本来同一である可能性がありそうであるが、これは意味の上からの検討を加えてから決定すべき課題であ

Osaka Shoin Women's University Repository

る。

さて、「じもの」という形を取った語例はすこぶる多く、

犬じもの　家じもの　鵜じもの　馬じもの　鹿子じもの　畏（かしこ）
じもの　鴨じもの　鹿猪（しし）じもの　床（とこ）じもの　鳥じもの　男（をとこ）じ
もの

と、ほとんど自由に造語されたもののようである。ということは、その結合が文法的といってもよい程で、「犬」「じ」「もの」三語の連結による連語が副詞的修飾機能を定着させたと見た方が、上代語としては真実に近かったかも知れない。

そこで、右にあげて来た、「時じ」と「我じ」「〜じ」が語として同類なのか、私は私の理解の中で思い惑い続けてきたのである。本稿をまとめて見ようと思い立ったのも実はそのためである。この点に関して、三つの説があるように見受ける。

一つは三者を統一的に追求することをしないで、それぞれを文脈・歌意の上から理解してゆこうとする立場を示している説である。注釈書はほとんどこの立場を取っている。辞書も大体この線に従っている。『時代別国語大辞典上代編』で代表させて見ると、

ときじ〔不時・非時〕時（トキ）が形容詞語尾をとったもの。ⓐ時を選ばない。絶えまない。…ⓑ時ならず。その時でない。時節はずれである。…

〔考〕ⓐⓑ二つの意味を記しわけたが、それは説明の便宜上からであって、当時それほど相異なるものと意識されてはいなかったであろう。トキジクノ↓（次項〔考〕）とか、いや時自久に（四一一二）とか、普通の形容詞に見られない用法をもっている。また「不時」と記す万葉一二六〇・一九七五はトキナラズ・トキジク両様に訓まれて決定しがたい。↓じ（シク）・じもの

よく要を摘んであってありがたい解説である。だが、終わりの「↓じ・じもの」は区別せよというか、関連させて考えよというのか、いささか戸惑いを感じさせる点がないでもない。「われじ」や「じもの」の意味の解説には「ときじ」のそれとの共通点も関連性も説かれていないで、しかも「じ」「じもの」の解説の中には「時じ」もその語例として含めてあるので、利用者としては立場を定めかねるという困惑におちいらざるを得ない。

「じ」「じもの」を形態素（モルフェーム）としての同一性あるものと認めて統一的に考えるのは、第二・第三の立場である。「時じ」の方に引きよせて「じ」に打消の意味ありと見ようとする立場を、仮に第二のものとしておく。この立場を取る人は、たとえば、「犬じもの」は「犬でもないのに」という意味を表わすのが本来であったと解するのである。

第三の立場では「我じ（シク活）」や「〜じもの（副）」を類似の意を表わすとして、その語例の中に「時じ」を含めるのである。これも私の管見では『時代別国語大辞典』の解説が最も要を得ているように思う。ただし、「時じ」の解説と「じ」「じもの」のそれとの間に統一を欠いているのではないかと思われること、前述の如くである。

Osaka Shoin Women's University Repository

われじ（形シク）わがことであるかのようだ。反射指示の代名詞ワレに形容詞構成の語尾ジが接している。…

じ（シク）体言に接して、〜らしいさま・〜のようなさまの意の形容詞を作る語尾。〜ジモノの形をとる場合が多く、それらには形容詞として活用した例を見ない。…

じもの　〜であるもの・〜のようなもの。通常名詞に接し、〜ナスや〜ノゴトのような比喩の修飾句をつくる形式として用いられることが多い。…

〔考〕ジは、体言またはこれに準ずるものに接してシク活用形容詞を構成する。時ジ・我ジ・母ジ（オモ）などのジに通ずるものであろう。第七例のカシコジモノは、形容詞語幹にジモノがついた特殊な例であるが、従属・謙譲の態度を示す犬ジモノ・鴨ジモノ等の抽象されたところに現われた表現かといわれる。

引用に際して例文を省略した。後で細説するところでまた引かざるを得なくなるので、それとの重複を避けたのであるが、各辞項の解説の対照比較を明瞭にしようとする意図もあった。

ところで、右の「じもの」の統一解説のように「時じく」「時じき」の接尾辞「じ」を「〜じもの」の「じ」と同一形態素と認めようとするならば、「時じ（シク）」の語義についての検討がどうしても必要である。「じ」が名詞に接して形容詞化する形容詞性接尾辞である点は共通するが、それだけでは同一性は証明されない。意味の上でのつながり、共通性なり類似性なりが認められることが、絶対に必要である。この点で、「時じ」の項と「じもの」の項との解説が、別々の方向をさしているかに見受けられる。

二　三つの立場の吟味

第一の、それぞれの語例を別々に、文脈に応じて解釈してゆく立場は、一番おだやかであるし、危険も少ない。「我じく」と「時じく」とを意味の上から比較すると、かなりのちがいがあることは否めないことである。この両者の中に形態素としての同一性を論定しようと試みることは容易ならぬことのようにも思える。しかし、個々の用例・文脈からのみ考えてゆくという方法には、多少の不安なしとしない。契沖は『源注拾遺』の中で「おぼろけならで」に注して、

細流におぼろけならぬことならではと也とあるは、注の詞をこにおかば叶ふべけれど、さにはあらぬ詞なり。

と記している。文脈主義で見落としやすいことがしばしばあることを、私たちも見て来ている。「時じく」という表現は確かに「不時」「非時」という意味をも表わしているが、たとえば冬でない季節に雪が降っていることを表わしているが、冬ならぬ季節にあたかも今が冬の季節であるかのようにという形容をしていることも認めることができる。今は冬ではないという否定的断定と、今が冬であるかの如くにという比喩的形容と、どちらが「〜じ」の本原的な意義であるか。これは、重要なことであり、この点を究明すること

Osaka Shoin Women's University Repository

は、第二第三の立場について吟味する上にも不可欠な前提となると思われるのである。「時じ」の多くの用例を並べて見ると、その個々の表現の示す意味が必ずしも均質と言えないものも感じられる。「山越しの風を時じみ」は、いつも絶えまなく風が吹くことを表わし、「いつもいつも来ませわがせこ時じけめやも」は、反語で「時じ」に否定を加えているのに、絶えまなく君が来ることを願っている。これだけでも「時じ」の意味の複雑さが思われる。その辺の考察は、あとで項を改めて述べたい。ここでは、「時じ」がある本原的な意味から、文脈によって重心を時には著しく否定判断の方に移したり、擬似的形容の方に移したりしていることを予測しておくにとどめる。この予測は、第二第三の立場との統一への道を暗示する。つまり、「時じ」の「じ」も、他の「〜じ」「〜じもの」の「じ」と、意味の面からつないで考えることができ、形態素としての同一性を認定すべきだという考えを導く。

「時じ」の接尾辞「じ」の本原的意義が打消にあると考へる立場は、きわめて素朴に考えてもある種の抵抗を禁じ得ないものがある。名詞に打消の辞を加えるという形態が日本語に他の例を見いだしがたいのである。打消の助動詞「ず」「じ」ならば、動詞的活用の語詞の未然形に付く。「時にあらず」「時ならず」とは言っても、「時ず」とは言わない。それに、「時じ」「時じく」が形容詞性を持つことは明らかで、それが、名詞に形容詞性接尾辞を下接せしめていることは、これまた明らかである。このような語構成の常道に背いて、「時じ」だけが「時」であることを打消す意味を叙述すると考えることは、どうも自然でないのである。

「〜であるかのように」と言えば、言外に必ずや「〜ではないのに」の意を含む。だからといっても、「〜であるかのように」がただちに「〜ではない」を表わす語形とは認めがたい。「時じ」「時じく」の語義に関しても、右のような条理をたどってみる心要がある。このことはあとの項で再論する。

第二の立場、「時じ」「われじ」から「〜じもの」までを統一して、「じ」の本義を、打消にありとする説について、その立脚点を考えてみたい。これは橋本四郎氏が『万葉』第十五号（昭和30年4月）で提唱されたところで、沢瀉久孝博士の『万葉集注釈』もこれを採用していられる。所説がきわめて清新であり、着眼も鋭く、敬服の念を禁じ得ないのであるが、「じ」が動詞または動詞的連語に付属することなくして打消の陳述または叙述をになうことが可能であるかどうかについて不安を感じることは、前述した通りである。

「我じく」「〜じもの」の類については、「〜の如くに」「であるかのように」と解する通説の方がわかりが早いことは確かで、本義・原義についてはしばらく預かるとしても、意味の核心・重心がこちらの方に寄っていることは認めざるを得ないように感じる。「犬じもの」「鳥じもの」「男じもの」は、仮に「犬でもないのに」「鳥でもないのに」「男でもなく、女である者が」などと訳語を与えても、文脈を一応満足させることはできる。だが、「犬でない」「鳥でない」「男でない」という意味を「犬―じ」「鳥―じ」

Osaka Shoin Women's University Repository

「男ーじ」という統辞形態で表わすことが、日本語の上に生じ得たであろうか。その可能性なくしては、「〜じ」という熟合が打消をになうことを原義としたという想定も不可能になりはしないか。これもあとで再び論ずることとして次に移る。

第三の立場は、『時代別国語大辞典上代編』に見えるものである。「我じく」「〜じもの」の「〜じ」の意味を「〜のように」という比喩を表わすものとして、「時じ」の「じ」をもこれに含めて説くものであることは前述した通りである。しかるにこの辞典の「時じ」の語義解説がこの統一的解釈の線に添うていないこと、三者を同一の類として「〜じ」の意味をどう説けばよいのかについては必ずしも明らかになっていないことも前述した如くである。

形態の面、語構成の面からは、この第三説の立場が一番無理がない。体言に形容詞性の接尾辞を下接させ熟合させて新しい形容詞をつくるのは、日本語の常である。形容詞として活用したことは明らかだから、その意味も形容詞的であるべきである。用例が限られていて他の活用形を残さないものもあるが、仮に終止形としての「〜じ」を設定してその意味を抽象してみるとしたら、それが「〜のようだ」「〜であるかのようだ」という意味を表わしても不自然ではない。これに対して、「〜じ」という形容詞終止形が「〜にあらず」「〜でない」という否定陳述、もしくは叙述を語義として持つと見なすことには、少なからぬ抵抗を感じる。

ただ、この第三の立場を取った場合、「時じ」「時じく」の類の意味の納得には、やっぱり苦しまざるを得ない。これを克服するためには、第二説を折中するほかはないのではないか。

第三説が、第二説をどう考えているのか、記されたところからだけではよくわからない。形態素「じ」を統一的に見ようとする立場を肯定した上で、原義の所在について、第二説に対して修正意見を提出したのが第三説であったかと思われる。この立場からの提唱には、多分「時じ」の語義についての新解釈が用意されてあったものと推測される。それが『時代別国語大辞典』の「ときじ」の項に現われずじまいになったという編集上の事情があったのではなかろうか。

「時じ」と「我じ」「〜じもの」との間に少なくとも意味の重心の所在にかなりの差異があることは認められる。と同時に、名詞の下について形容詞をつくる形態素（モルフェーム）「じ」を含んでいるという点で、共通性・類似性を示していることも、決して無視できないであろう。この意味と形態との間のギャップを埋めてみる試みが、現時点での課題であるように思うのである。

三　解釈のデータとその吟味

名詞に下接する形容詞性接尾辞「じ」を、すべて同一の形態素（モルフェーム）としてその原義を設定してみたとしても、それはそれぞれのすべての用例を矛盾なく説明することができなければならない。一つの除外例も許されてはならないのである。以下、すべてのデータを列挙して、その意味を検討してゆく。

Osaka Shoin Women's University Repository

データの第一のグループは「時じ」の例文である。「時じ」のすべての例文について、「我じく」「〜じもの」における「〜じ」の意義素に通ずるものが検出されなければならない。

(1)み吉野の耳我の山に　時自久ぞ雪は降ると言ふ　間なくぞ雨は降ると言ふ　その雪の不時が如　その雨の間なきが如　隈も落ちず　思ひつつぞ来る　その山道を　（万葉・巻一・二六）

これは二五番の歌の異伝で、「或本歌」として載せられている。二五歌には「時無」と表記されていて、そちらでは「時なく」「時なき」と訓んでいるが、「不時」「非時」「時じき」と訓じている例から推せば、それも「時じく」「時じき」と訓じてもわるくないような気がするが、それは固執せずともよかろう。

「時じく」「時じき」が「間なく」「間なき」と対をなしている点、「不時」という表意的表記がある点から、「その季節でない」意を表わしていることはもちろん認めなければならない。だが、それだけではなかろう。「その季節でないのに雪が降っている」というのである。「冬でないのに冬であるかのように」真白に降り覆うている珍しさを形状しているのである。雪が降っているが季節がはずれているという否定判断ではなく、季節でもないのに「今をその時ぞとばかりに」という肯定的形状を表わしている点が、文法的機能から考えても、むしろ強いのである。

(2)小治田の年魚道の水を　間なくぞ人は汲むと言ふ　時自久ぞ人は飲むと言ふ　汲む人の間なきが如　飲む人の不時が如　わぎも子にわが恋ふらくは　やむ時もなし（〃・巻十三・三二六〇）

(3)み吉野の御金の嶽に　間なくぞ雨は降ると言ふ　不時ぞ雪は降ると言ふ　その雨の間なきが如　その雪の不時が如　間も落ちず吾はぞ恋ふる　いもが正かに（〃・巻十三・三二九三）

(2)(3)ともに(1)の類型歌であり、意味の考察も(1)に一括してよい。三例とも「時じ」の中の「時」は「季節」を意味する。(2)の「時じくぞ人は飲む」については、人々が泉の清水を掬ぶということには季節感があるものだけれども、年魚道の水は、これを愛する人々が夏季に限らず何時も何時も飲むというのであり、この泉には一年中何時でもが水のおいしい季節であるのである。

(4)天地の分かれし時ゆ　神さびて高く貴き　駿河なる富士の高嶺を天の原ふりさけ見れば　渡る日の影も隠ろひ　照る月の光も見えず　白雲もい行きはばかり　時自久ぞ雪は降りける　語りつぎ言ひつぎゆかむ　富士の高嶺は　（〃・巻三・三一七）

これも「時じく」に関しては同型の表現をしている。この歌の「時じくぞ雪は降りける」は、今見れば季節はずれに雪が降っているというだけの叙景ではない。今だけではない、何時見ても冬の季節と同じように雪が降っていたことを含んでいる。

だが、ここで多少の困難を感じさせることは、「時じ」が連用形以外の形態を取っている場合に、意味の変容が感じられることである。

(5)山越しの風を時自見　寝る夜落ちず家なるいもをかけてしのひつ（〃・巻一・六）（〃・巻十・一九三一重出）

Osaka Shoin Women's University Repository

山越しの風の絶え間なさを「時じみ」と形状している。だが、これも否定判断としてではなくて、山では何時も何時もが風の強い時と同じようなので、という意味から「常時」の意が最も強く表面に出たものである。「時じ」の語幹形に接尾辞「み」が付いている。

(6)河の上のいつ藻の花の　いつもいつも来ませわがせこ　時自異めやも　（〃・巻四・四九一）

結局は「いつでも時節はずれということはございません」などと訳されている。「時じく」という副詞的修飾では、「常に」とか、「珍しく」とかいう意味が導き出されることが多いが、「時じけめやも」は反語で打消しているから、この表現ではまさに「時節でない」という意味が「時じ」の表面に出ていると見ざるを得ない。これはどういうことであろうか。「いつもいつも来ませわがせこ時じけめやも」が言おうとしているのは、「時節でない時にあだかもその時節であるかのような顔をしたなどとがめられることがあろうか」というような、やや複雑な経路を通っているかと思われる。そのために、「時じ」の中に否定的語気が強まったのである。

(7)むつき立つ春の初めに　斯くしつつ相し笑みてば　等枳自家米也母　（〃・巻十八・四一三七）

この歌は、いささか難解だという気がする。『日本古典文学大系』の頭注を拝借して掲げてみる。

時じけめやも―時ジは時ならずということ。その時でない時があろうか。何時でもその時である意。〔大意〕正月のはじめに、こうして互に笑顔を交し合うなら、全く時節にふさわしい喜ばしいことである。

語釈は結局はこの通りになると思うし、異存があるけではなわい。「何時でもその時である」という意味に帰着するのであるが、そこに帰結するまでの潜流を考えてみたい。この歌の「時」は、「互に笑顔をかわす」べき「時」である。それ以外は考えられない。「春の初め」の「時」ではなかろうと思う。春の初めの現在を「時」と捉えているとすれば、「何時でも」とは続かない。

この歌は、正月の初めにかくの如く相笑むことができたからには、年中常に和気靄々と楽しい笑顔をかわすにちがいない。何時がその時でないということはあるまい、と、年の始めに祝福したものであろうと思われる。右に抄出した〔大意〕の意味が、もし、正月の初めに互に笑顔をかわすことが正月の時節にふさわしいと釈してあるのならば、語釈の説明とくいちがいがあるのではなかろうか。

さて、ここでは「時じけめやも」がどうして「何時でもその時である」に帰結するようになるのか。前述して来た線で説き明かすことは容易でないことは確かである。

一年中の何時でもが、その時でないという時はない、という意味になっていることは明らかだと思うのであるが、それでは「時じ」は打消を本義とするとせざるを得なくなって、「我じく」などとのつながりがつかない。かと言って、「我じ」の本義が「我」の打消だと逆に取って見ることも、日本語の文法形態から考えて抵抗が大きすぎる。

右の四一三七歌における「時じけめやも」を、次のように考えて

Osaka Shoin Women's University Repository

みてはどうか。元日にこんなに楽しく相笑むことができたことは、一年中かくあるべきことを予告するものであろう。今日のような楽しい饗宴がこれから何時催されようとも、決して時節はずれに時節めかして行なわれたということにはならないのだ、何時でもがまさにその時節であり、めかしたものではないのだ、というのであり、くどい言いまわしのようだが、事、実まさに屈折の多い言いまわしであった。

四九一歌も四一三七歌も、右のように考えれば、全く同じような表現していることが納得される。四一三七の方は、「むつき立つ春の初めにかくしつつ相し笑みてば」の下に、「年の内は何時も何時もかくてぞあらむ」という句が省略されていると見るべきで、それが四九一の「何時も何時も来ませ」と対応しているのである。『大系』の注の〔大意〕に両者方向を異にした訳文をあてている違和感も、この操作で除去することができる。

四九一―いつでも時節はずれということはございません。

四一三―全く時節にふさわしい喜ばしいことである。

これでは、類型歌二首の同一の結句の意味としては離れすぎているのではないか。二者はどちらも「何時でもまさにその時節だ」という気持を表わしていると解釈すべきものである。

(8)わがやどの非時藤の　めづらしく　今も見てしか　いもが笑まひを　（〃・巻八・一六二七）

連体形を用いた例。ただし、「ときじき」の仮名表記例はなく、旧訓は「トキナラヌ」であるから、決定的な訓とは言えないが、まず妥当な訓であろう。天平十二年六月、大伴家持が坂上大嬢に贈った歌、普通の藤だったら旧暦では三月か四月の頃に花咲く。藤花の季節にははずれて、珍しく今をその季節であるかのように咲いていることを表わしている。

(9)国見する筑波の山を　冬ごもり時敷時と　見ずて行かばまして恋しみ　（〃・巻三・三八二）

これなども「その季節でない」という否定に重心の置かれた表現であるが、季節はずれにその季節であるかのような顔をして山に登るのは気がひけると思って云云という表現であるとすれば決定的な除外例とはなるまい。

(10)すめろきの神の大御代に　田道間守常世に渡り　八矛持ち参出来し時　時じくの香の木を実を　畏くものこし給へれ（中略）　宜しなへこの橘を　等伎自久の香の木の実と　名づけけらしも　（〃・巻十八・四一一一）

(11)橘は花にも実にも見つれども　いや時自久に　なほし見がほし　（〃・〃・四一一二）

「時じくの」と言い、「時じくに」と言っている。通常の形容詞にはない使いかたである。連用形に体言性を持たせたとも説明できるが、むしろ連用形の副詞への転成・定着の方向を認めることで説明されるであろう。意味面では、「時じくの」は形容詞相当、「時じくに」は副詞相当であり、(10)は他の果物のない季節に、この橘だけが何時でもその季節であるかのよう実を結んでいるさにまを形容しているし、(11)は、何時見ても他に花も実も見られない季節だけに

Osaka Shoin Women's University Repository

珍しく思われてと言っている。時ならぬ頃に時めいているのが「時じ」の本義であることを証していよう。

第二の類は孤立した例しかないが、「我じく」で副詞と定めておいてよかろう。

⑿立ち別れ君がいまさば敷島の人は和礼自久（われじく）斎（いは）ひて待たむ

（〃・巻十九・四二八〇）

「われじく」は、「私のように」とか「わが事のように」とか解釈されている。前者ならば「私以外の人も私と同様に」という意味になろうし、後者ならば、君に直接関係のないものでも、自分の事のように」ということになろう。「誰もが」という含みがあることは確かである。ここの意味のありかたが、前述の「時じく」のそれに一脈の通ずるところのあることを感じさせる。

『万葉集注釈』（沢瀉）には、橋本四郎氏の説を援用して次の如く注してある。

人は我じく―「我じく」は、吾の如く、の意と思はれるが、この「じく」については、橋本四郎君が「上代の形容詞語尾ジについて」（万葉第十五号昭和卅年四月）の中で、この「ジ」はカモジモノなどのジと同じく、やはり打消のジにつながるもので、ワレジクといふ連用形は「我が事ではないのにまるで我が事であるかのやうに」の意と述べられたのに従ふべきだと思ふ。

この橋本氏の「わが事ではないのにまるで我が事であるかのやうに」という語義の捉えかたは、きわめてすぐれたものであって、大体において従わなければならないと思う。単に「我の如く」と解したのでは、「我じく」の微妙な表現性を捉えることはできない。ただ、前にも触れたように、「じ」が打消の「じ」につながるものであるという点には、にわかに同意しがたいものを感じる。この副詞「我じく」の持つ表現的意味の中には、橋本氏の釈義に見られるように、二つの要素のからみあいがある。

A　わが事ではないのに

B　まるでわが事であるかのように

ABいずれの要素が原義であるのか。「我じく」の場合で考えると、Bの「まるでわが事であるかのように」が、「斎戒し、仏神に祈って待つ」という述語の意味に直結しているのではないか。より核心的な意味は、打消ではなくて、やはり比況であるのではないか。AとBとの本末について考えると、Bはその論理的必然としてAを内に含むのである。語の原義に由来しなくてもAはBの中に随伴的に生ずると思われる。

甲が、まるで乙であるかのように

という表現では、

甲は乙ではない

ということが必然の条件として前提されているのである。このことがただちに「乙であるかのように」（B）が「乙ではない」（A）と等義であることにはならない。

これが逆に、「甲は乙ではない」という否定表現（A）が「甲がまるで乙であるかのように」という比況（B）に転化してゆくということは、到底あり得べくもない。

Osaka Shoin Women's University Repository

「我じく」の「じく」は、打消の辞であったのではあるまい。文法的性格はやはり比況にあって、それが我であることを否定するために付けた接尾辞ではなく、君の無事を祈って待つ人々が、君に縁故のある人もない人もひとしく、自分の事のように切実にそうするにちがいない、というところに言語的意味の核心があると思われる。

第三の類は「〜じもの」の形態を示す群である。

(13)真木さく桧のつまでを　もののふのやそうぢ川に　玉藻なす浮かべ流せれ　そを取るとさわく御民も　家忘れ身もたな知らず　鴨自物水に浮き居て　（〃・巻一・五〇）

(14)世の中を背きし得ねば　かぎろひのもゆる荒野に　白たへの天領巾隠り　鳥自物朝立ちいまして　入日なす隠りにしかば（〃・巻二・二一〇）（二一三重出）

(15)波の上をい行きさぐくみ　岩の間をい行きもとほり　いなびつま浦廻を過ぎて鳥自物なづさひゆけば　）〃・巻四・五〇九）

(16)鳥自物海に浮きゐて　沖つ波騒くを聞けば　あまたかなしも（〃・七・一一八四）

(17)玉ぼこの道の隈廻に　草手折り柴取り敷きて　床自母能うち臥い伏して　思ひつつ嘆き臥せらく　（〃・巻・八八六）

(18)石の上布留のみことは　たわやめの惑ひによりて馬自物縄取り付け　（〃・巻六・一〇一九）

(19)鹿猪自物弓矢かくみて　天ざかる夷べにまかる　（〃・〃・〃）

(20)速川の行くも知らに　衣手のかへるも知らに　馬自物立ちてつまづく　（〃・巻十三・三二七六）

(21)鹿児自母乃ただ独りして　朝戸出のかなしきわが子　（〃・巻二十・四四〇八）

『万葉』の用例は右の如くである。長歌はその部分だけを抜き書きした。「〜じもの」の意味は「〜のように」または「〜でもあるかのように」と取って見るとよくわかるものばかりである。この場合にも、「じ」の意味は打消であるとする立場があること、それが傾聴すべき点があることは、前述の如くである。

打消説を提唱された橋本四郎氏の論を引いてその説を用いられた沢瀉博士の『万葉集注釈』の文を引用させていただく。

鴨じもの―「鹿じもの」「鳥じもの」と同じく、鴨の如きものと普通訳されてゐるが、その「じ」は橋本四郎氏によれば、「じ」と同じく、本来は打消をもったもので、似て非なるものを示す要素として用ゐられたもの。従ってこのやうな譬喩の場合に用ゐられ易いのである。もともと「鴨じ」といふシク活形容詞の語幹と「もの」とが熟合した体言で、それが連用修飾語として用ゐられたもの。体言が助詞を伴はずに連用修飾語になるといふことは体言一般の用法から見れば特殊であるが、形式名詞の場合は「まま」「むた」「なへ」のやうに副詞を作るものがあり、副助詞の多くが形式名詞由来であり、「もの」「ゆゑ」のやうに接続助詞になるものがあることを考えると、形式

Osaka Shoin Women's University Repository

名詞のもつはたらきの一つに連用修があったと考えるべきではなかろうか、というのである。

前に述べた私見とも関連するが、たとえば「鴨じもの」が「鴨でないもの」について鴨の属性の一つである水に浮いて行動しているという状態に似るということを表わす副詞であることは明らかであるから、「鴨ではないものを」と訳しても文理が通ずることも確かである。第二説の根拠はそこにあると思われる。だが、これも前述した所と関連するが、「鴨―じ」で否定文を作ると見なすことが、形態論上納得しがたいものがあることも否めないと考える。その逆を取って「鴨じ」が「鴨のようだ」という意味の形容詞を作っていると見なせば、その主格に立つものは当然鴨ではないものであることを前提としているのである。「じ」を打消であるという解釈を捨てても、第二説と同じ理解に到達することができるのではないか。

「鴨じもの」以下の「～じもの」の意味・用法は全く同型をなしているが、ここにすこぶる趣きを異にした「～じもの」の例文がある。

㉒斯天日嗣高御座乃業者、御命爾坐世、伊夜嗣爾、汝賀御命聞看比、勅夫御命乎、畏自物受賜理坐天、食国天下乎恵賜比治賜布間爾、（続紀宣命・一四・天平勝宝元年七月）

（この天つ日嗣高御座の業は、御命に坐せ、いや嗣ぎに、汝が御命聞こし看せと、のりたまふ御命を、畏じものうけたまはりまして、食す国天の下を恵みたまひ治めたまふ間に、）

「畏自物」が「かしこじもの」と訓むべきことは疑いない。「自物」が細字にしていないことは、これを助辞とする意識がなく「かしこじもの」を単一の語詞と感ずる気持が強かったことを示すと思われる。

さて、前に列挙した「～じもの」は「～」が名詞であったのに、この㉒だけは形容詞の語幹に「じもの」を付けた構成である。そして「しかじかでないのにしかじかであるかのように」という意味は、この例にだけ認められない。「畏きものにあらざるに」では勿論あり得ず、「畏きものの如く」でも文意を破壊してしまう。つまり、これだけが「～じもの」の除外例となっている。

語義研究の鍵を除外例が卸って握っている場合があると思う。「畏じもの」がかしこむさまの形容であるという点は、「雪じもの」等が「雪のように白い」等のさまの形容であるのと、基本的な一点では相通っていたと思われる。ただ他の「～じもの」が属性の比較においての類似を表わしたのに対して、これは畏く思う心がさながら挙動姿態の上に現われていることを形容していたと思われる。「うやうやしく」とか、「かしこげに」とかいう意味に取らないと、右の例文は解釈できない。この事実は、上代の形容詞性接尾辞「じ」の意味を知る上に重要なヒントを与えるものではなかろうか。

かりに前述の第二説に従って「じ」の本原的意味が打消にあったと考えた場合、右の㉒の「畏じもの」は、意味が転化して打消の要素が消えてしまったのだと考えなければならない。そう考えること自体はさしつかえはないかも知れない。しかし、「畏じもの」とい

Osaka Shoin Women's University Repository

う語がそれ程新しいものとも見えないのだから、右の考えにも弱点がありそうである。むしろ、「じ」は体言または体言性の語に付いて、そのもののさながらの状態が現われることを示す形容詞をつくる接尾辞で、それが「我じく」「雪じもの」のような使われかたをすると文脈から随伴する意味として「我にあらぬ者も」「雪にはあらぬ物を」などが加えられ、「時じく」では語義が根本的に変化したわけではないが「季節にあらぬに」の印象がより強くなったのであると解した方が、妥当性に富むであろう。

付記　この稿は昭和48年度文部省科学研究費（総合研究A）の交付を受けて行なった研究の一部である。

（昭和49・4）